

ました。読書感想文を書くために何日か前に
 読んだ本でした。この『走れメロス』を読ん
 だとき、友情とはすばらしいものだろう、人
 を信じることは尊いものだろう、力強い気持
 ちに
 になりました。しかし、●●君のお父さん
 の話を聞いた後では、「この小説っていった
 い：：」と、数日前に感動した自分が、むな
 く思えてしまいました。
 ●●君のお父さんはとてもいい人でした。
 商店街の野球チームでピッチャーをしている
 こともあり、カーブやシフトの投げ方を教
 えてくれました。子どもころからプラモデ
 ルが趣味だったというところで、接着剤でくっ
 つけただけの僕のプラモデルに何回も何回も
 色を重ねて塗ってくれました。色を塗られた
 プラモデルはまるで本物のようになりまし
 た。それは今でもわたしの宝物です。
 どうしてあんなに優しかった●●君のお父
 さんが、土地と家を取り上げられなければな
 らないのでしょうか？ 夕食後、このやるせ

ない気持ち。父に話しました。
 「でもね、これは現実なんだ。現実
 は現実として受け止めないといけ
 ないんだ」
 そう答えました。
 「でも、『走れメロス』では、
 ……」
 と言うと、
 「小説は小説なんだ。もしかしたら、
 『走れメロス』は、友情のすばらし
 さとか、人を信じる尊さとかの話
 ではないのかもしれないね。友情は
 こうあるべきだ、人を信じれば報
 われるんだという願望が小説とい
 う形になったのかもしれないね。
 きちんとした答えになって
 いるかどうか自信はないけどね。…」
 それが父の答えでした。
 父の言うことが正しいのか、わ
 たしには分かりません。人を信じ
 るとはどういうことなのか、自
 分でも一生懸命考えてみました。
 かし、答えは見つかりませんでした。
 でも、「小説は小説なんだ」の、父
 の言葉がずっと耳に残って、今も
 離れません。